

楠公子に訣るるの図に題す（頼山陽）

海旬陰風草木腥 史編特筆姓名馨
一腔熱血存餘瀝 分與兒曹灑賊庭

解説 楠木正成・正行の親子が摂津の桜井の駅で訣別する図に題し、正成が我が身を大皇に捧げたのみならず、子の正行まで使わして他日の挙に備えた二重の忠義を賞讃したものの。

海旬の陰風 草木腥し

語釈 ※楠公訣子図 楠公父子が桜井に於いて、今生の別れの儀式を行っている図を見て賦したもの。 ※海旬 海に接した地方。ここでは湊川の海岸をいう。 ※陰風 陰気な風。 ※史編特筆 歴史の書物に特別なこととして記す。 ※一腔 満腹に同じ。 ※余瀝 歴はずく。 ※兒曹 こともたち。 ※賊庭 賊の陣中。 ※灑 血をそそぐ。 正行が四条畷で足利軍との戦いに敗れて自殺したのをいう。

史編特筆 姓名馨し

通釈 湊川一帯の戦場には、殺気を含んだ風が吹き荒れ、草木までが血に染まって腥い。この地で戦死した正成公に対しては歴史の書物が特別に重く扱っており、その名は後々の世までも香っている。誠に正成公の身中に満ち溢れる熱血は、己一人のみならず、その滴りを子孫に分け与え、他日、子の正行は賊軍と戦って壮烈な死を遂げたのであって、その忠誠の情は深く人を感動せしめる。

一腔の熱血 余瀝を存し

児曹に分与して 賊庭に灑がしむ